

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 大岡昇平 『野火』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 30 回のツイキャス読書会の課題図書は、大岡昇平さんの『野火』です。

2015 年に映画化されています。 [映画の予告編](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「野火」感想文

映像はかなり衝撃的でした。何度も目をつむりたくなる場面が見られました。

一番心に残ったのは、生きるか死ぬかの究極の場に陥った時の人間の非情さです。

死んで行く者に誰も同情を持ちません。いえ、感情さえ止まってしまったかのようでした。（靴を順に履き替えていく場面など）

「人は辛い目にあうと、辛い人の気持ちが分かり優しくなれる」は、通用しませんでした。互いに人を疑い怖さから簡単に人殺しをしていくのです。

主人公もその面が見られました。（塩を手に入れる場面）

でも、仕返しをするようなことはできませんでした。（仲間が憎しみから人を殺す時に手伝ったりしない場面）

彼は自分の行動を咎める心が残っていました。（食べてもいいと言われても腕を食べなかった場面）

けれど現実の世界では、その心を認めるには自死を選ぶしかありませんでした。（最後の場面）

私は今、未来の日本が、このような状況にならないことを切に願っています。

（おわり）

「野火」感想文

人間は自分が死ぬとなればなんでもしてしまう生き物なのかもしれない。
その時、あなたならどうするか？を問われている小説だと感じました。

余談ですが先日、イーライ・ロス監督の『グリーンインフェルノ』を見ましたが、食人族が美味しく人間を食べる映像を見ましたが、キツかったです。

主人公は、自分は人を食べなかったことをとても強調していたが、食べなかったことを強調したいぐらい飢えて死にそうであり、一步間違えていれば(左手が右手を止めていなければ)主人公も人間を食べてしまっていたと思う。

しかし、それでも理性に負けて生きること必死な人は、なんでも食べて命を繋いだのだと思います。

誰だって戦地にいて死にかけていたら、最終的にはどういう行動に出るかわからないと思う。

相手に白旗振っても、撃たれる場合もあるし助かる保証もない。

戦地に赴いた方は、ほとんどの方が肉体的にも精神的にも大きな傷を負っていると思うので、戦争は地獄であるということ改めて認識させられました。

この小説を読んでいると、ホラー映画のゾンビは、無意識に人を食べるのだけれど、戦地に飢えた人間は食べるしかないという狭い選択肢の中で人間を食べなければいけないので、ある意味で死んでいるゾンビよりも、生きている人間の方が恐ろしいと思いました。

また塩や手榴弾を巡って、仲間を助けたり裏切ったりするし、自分以外の人間も恐ろしいし、自分の中に隠れて潜んでいる内面も怖い気がしました。

人間は、孤独や絶望が続くと自分の中に神を求めてしまうものかもしれない。
そして少しずつ壊れていくのかも。

毎日、隣国の核実験やら国内のミサイル防衛についてさまざまなニュースが飛び交っていますが、戦争は本当に繰り返してほしくないと思うのですが、戦地に行くのは末端の庶民であるので僕は勘弁してほしいなと思っております。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『野火』 感想文

私は、戦争とは悲惨なものだと改めて思いました。そんな事は前からもちろん思っていたましたが、人間が人間でなくなるという恐さを感じました。

生き延びるという事が死ぬより悲惨なそんな印象を受けました。

私が一番印象に残ったのは

(引用はじめ)

剣を持った私の右手を、左の手が握ったのである

(引用おわり)

自分自身に、良いことなのか悪いことなのか問いかける事は大切だなと思いました。

田村という男が、最初のごく普通の人だったのに、逃げて行くうちに段々と普通じゃなくなって行って、とうとう人の肉を食べようか？ という考えになってしまったのは本当に悲惨な感じがしました。

悪いこともやってしまう本能のままの自分と、冷静に良いことなのか考えられる自分との間で苦しんで、自分を見失いそうになっていたけれど、思いとどまってくれてホッとしました。

でも、猿の肉はショックでした。うすうす怪しいとは思いましたが…。自分だったら潔く死を選べたのかなと考えるとどうする事が良かったのか分からなくなりました。

悲惨で過酷な状況が続くお話でしたが、時々夕焼けの綺麗な様子や自然の綺麗な風景が目に見えなくて少し癒されたのは良かったと思いました。

(おわり)

『野火』 読書感想文

「誰が本当の殺人者か知らない 愚劣な日本軍の作戦」

必要の無い壕を掘るくらいしかやる事のない本隊。属する分隊長の最大の不安事である食糧の調達が肺病の為困難なので、「死ね」と言われたのと同様に、敗戦兵同様の田村一等兵が本部隊を追放されます。その時支給された芋を雑糞にしまう手が震えます。状況が悪化して以来隠しきれなくなった不安を兵士に向って爆発させていた分隊長と異なり、田村一等兵は相手の心情を分析したり、哲学的な思索をくりひろげたり、冷静にみえます。ですが芋をしまう時の彼の心情は計り知れません。私は、この冒頭部分だけでも、悔く、かなしい気持ちでいっぱいになってしまいました。

「出生の偶然と死の偶然の間にはさまれた生活の間に、意志と自称するものによって生じた少数の事件を数え、その結果生じた一貫したものを、わが生涯とか呼んでみずから慰めてる。」そう思索する田村元一等兵は、権力のために偶然を強要された前線での奇怪な生活と現在の安らかな生活を繋げる事が、偶然を必然に変え得る、手段であるとして手記を書いています。

戦争を題材にした小説を読んだのは初めてなのですが、これまでに戦争をテーマに様々な情報を見聞きしてきました。この小説は、戦争の悲惨さや無念さを主に描いているのではなくて、極限状態での行動や、内面の事が主題なのかと思いました。今まで見聞きした戦争の現象とは、全く違うアプローチです。「臓腑を抜かれたような絶望、一種陰性の幸福感、行く先がないというはかない自由」を携えた連帯のない孤独なひとの内面を奥の奥までズームした手記です。まだ、何も理解できていませんが、物凄い事が書いてある事だけは理解できたように思います。何度も読みたいです。

終盤の、精神病院で医師に課せられた日課の《整頓掃除》をしている間は偶然をわすれていられる。というところを読んで、幼年期になかなか人に馴染めなく、学校の休み時間に、お道具箱をずーっと、ひとりっきりで《整頓掃除》している自分を思い出し、切なくなりました。

(おわり)

『野火』 大岡昇平 読書感想文

「たといわれ死のかげの谷を歩むとも」

こうプロローグされ、力なく原野を歩きはじめる。

死が普遍的な事件だった前線の比島。部隊からも病院からも追い出され「行く先がない道」を孤独を伴って歩く。死までの時間だけが唯一の自由であり、道は一本道。部分的に故国の風景を重ねながら、熱帯の太陽のもとを歩く。俯瞰と接写の繰り返しで描かれた風景は、コントラストの効いた数学的で深い色彩に塗られている。

銃は国家が私に持つことを強いたものである。この時この島において我が祖国とはなにか。命が丸腰でさらされているのに手元にある銃の遊底蓋には菊紋にバツテンが刻まれていた。契約を裏切ったのはどちらなのか。答えを求めてまた歩く。重たい雨が降り続く。池へ銃を投げ捨て、戻る道は裸足だ。

倫理の左手は止める。誰かに見られている意識が限界の自身に残り、不条理な事件が繰り返される。陰性の幸福感を感じながら仰ぐ空に、黒い太陽が鈍くまぶしい。

作家は、批評家らしい理知的な眼差しで極限に達した人間を見つめていた。形而上理論を小説に落として、この作品は 1951 年発表された。倫理の喉もとにナイフをかざすような文章の裏に、わたしは「もののあわれ」が描かれているように感じた。

野火とは事象。ある日本兵が落ちる処まで落ちきった果てにさまよい求めた紫煙。作家はここで、精神の実験を行う場所とし小説にまとめた。発表から 66 年経ち、いま思うのは国家の律に従う民に、戦争はあまりに非情であり、神すら見失わせる。過去のことではない。なにも終わっていない。この国を憂えること以外に答えは見つけ出せなかった。

(おわり)

『 われ深き淵より汝を呼べり 』

現在、我々が生活している世界は、「生」と「死」がはっきりと別れている世界である。人が亡くなれば、葬式を出し死者を送り出すので、生と死が混在することはない。「死」は特別なものであり、自らと遠いところにあるという概念しかない。しかし、そうでない世界は現実にあった。この小説に書かれている敗北直前のフィリピン戦線がそうだ。これは、小説後半で「狂人」が書いたとされるが、東南アジア各地での戦争時の現実だ。

結核で本隊から追放された田村一等兵は、この状況下の中、共同体から離脱することで、最初の生死の混濁の中に巻き込まれる。人間は、肉体と精神の両輪でないと「生きれ」ないのだと田村一等兵を私は哀しく見つめていた。本能としての肉体の動きと倫理としての心の動きが分離していく様が切なかった。追放された直後には、自由という陰性の幸福が身体に溢れ、すでに自分は死んでいるから生命に執着するのだと、自らの分離を納得させていく。しかし、田村が「見られて」いると感じていたのは神の視点ではなく、自らの倫理観なのだと思う。生命の維持と倫理観がせめぎ合う中、キリスト教に憧れたことのある田村には、自らの精神に起こっている状況を納得するための自らの守り方だったのだ。生命の維持のためには、人肉を「猿」の肉と思い込んで食べる。でも、片方の倫理観は分離しているだけでそこにあるのだ。少年時代の宗教観を背景に、人肉を得るための殺人に自らを「天使」とし制裁を下す。戦場は神が通用しない「深き淵」であり、それが極限状態なのだった。

死にかけた将校の「死んだら食べていい。」という言葉も、実際は田村の内なる肉体の声だったのかもしれない。そうなると花が「私を食べていい。」という言葉は、内なる倫理観の言葉だ。花や人間以外の動物だって生命があると認識し、食べられなくなるくらいに。

復員した後も、分離した精神の副作用は続く。復員を喜ぶ普通の状態の妻と暮らせなくなってしまう。そのことを正当化するために、妻は精神科医と密通していると納得させている。自らが人肉を食べたことも正当化しなければ、娑婆ではまともに生きられない。「男はみな人食い人種であるように、女は淫売である。各自そのなすことをなせばいいのである。」との分離した肉体と倫理観を接合するための言葉は、かなり切なかった。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『野火』 読書感想文

最初私はなぜ田村が「すでに死んでいる」状態であったのか理解できなかったが、信州読書会さんの音声で「国家から見放された」ことは死を意味しているという考察を聞き、少し考えがまとまった。沖縄戦では島民はあらかじめ手榴弾を2個持たされたと聞いたことがある。敵に追い詰められたら1個は敵に投げ、もう1個は我が身に。軍によってあらかじめ集団自決への道が備えられていたということだ。最初私はそれを知った時、「なんてむごい」と思ったが、国家を失くしてもなお生き続けた田村の惨状を思うと、考えさせられた。上官から与えられた手榴弾で死ぬ自由を行使するほうが田村にとってどんなに楽だっただろう。

田村が死ぬ自由を行使しなかったのには理由があった。軍を離れ、死ぬまでの「自由」な時間のみを持ち異国の戦地をさまよう田村だったが、十字架を目にしてからというもの、見えてくる情景が一変したのだ。

田村は時々誰かに「見られている」気配を感じるようになる。私はそれは神からの視線ではないかと思ったが、「見られている」事を意識してからの田村は、比島の女の事を故意に撃ったのではないとか、人間であろうが野の花であろうが生命を持つ有機物は同等であるという見地にまで至ったりとか、自分の行いに(強固なこだわりにも思えるような)精神的葛藤を抱くようになる。

抱える苦悶は、田村の体の反射として現れる。肉体的な維持を求める右手と、神に見られているという理性の左手が自分の体の中で「分裂」する。ひたすら肉体的維持をはかり生き残ろうとするさまを田村は「傲慢」という言葉で表現した。安田、永松は右手の傲慢であり、自分は左手である。心に神を持ってから、田村は生命が尽きるまで同じ体に右手と左手の異なる二者を抱えながら歩き続けた。

『神は何物でもない。神は我々が信じてやらなければ存在し得ないほど弱い存在である。』(新潮文庫 p170)

田村は終盤の手記にそう記している。私は、神を心に抱く生き方を知らないがゆえに、田村の心情をすべて想像で補うしかない。しかし、「神とは何か」という問いに、戦場の過酷な状況下で心にただ一つ神を持ち生きた田村の生き様が、一つの示唆を与えてくれたように思った。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『男がみな人食い人種であるように、女はみな淫売である』

人間というのは、尊厳を大切にすることもできると同時に、畜生以下の卑劣さにも墮する生き物である。英語で言えば、尊厳は、dignityである。この言葉は、indignation（怒り）という言葉と関係があるのだ。個人の尊厳が、人間が人間たる本質だとすれば、人間は、怒らなくなったとき、もはや人間ではなくなる。

仲間の肉を猿の肉だと偽れば、飢えた人間は、食べるだろう。しかし、尊厳が麻痺すれば、今度は、仲間の肉を、口にするようになる。安田の肉を食べて生きようとする永松を、田村は、射殺した。

『男がみな人食い人種であるように、女はみな淫売である。』（P199）

いつまでたっても、この世から戦争がなくなるのは、人間が人食い人種であり、淫売であるからだ。

文明国に住んで、豊かな生活をしているが、一皮むけば、男は、人の肉を食い、女は淫売を生業としている。

ときどきワイドショーを観ていると感じる。政治も芸能も人食いと淫売で成り立っているのではないかと。

庶民の生活も結局同じだ。みな、誰かをだまして搾取して金を稼ぎ、自分をだまして、他人に尊厳を売り渡して金を稼ぎ、それを、仕方のないこととして、正当化して生きている。耐えがたい真実を薄々知っていても、「これは、猿の肉だ」とお互いに言い訳して、やり過ごしている。

戦争は人間の背負った業だ。平和な社会秩序も、何枚もめくれば、いつしか、人が人を食べ、淫売を糧として生きているような戦場さながらの陰惨な光景に出くわす。社会の片隅で、新聞の三面記事で、すぐ隣の家で、人間の業は、戦場と同じ絶望の光景を再現している。

壁の向こうに、私の永松がいる。悲しいかな、私だって人食いであり、淫売である。自分に怒りながらも、結局は、間接的に、人肉を食い、淫売を楽しむことに加担している。野火のような幻想にひきづりまわされ、浅ましい欲望にかられて生きている。

壁の向こうにいる私の永松を明るみに出して、射殺しようとするれば、脳の一片がもぎ取られるほどに苦しい。

（おわり）

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください http://bookclub.tokyo/?page_id=2343